

## 発泡PSリサイクルシステム

### プラ悪者に一石

パナ・ケミカルは、発泡スチロール(EPS)リサイクルシステムを「J-EPS Recycling」(リサイクリング)と名付け、市場認知度を高める戦略を打ち出した。使用済みのEPSを熱処理により減容化して再生プラスチック原料として輸出するシステムは同社が作り出した日本発祥の技術であり、今では欧米を含めて世界で使われている。このシステムに名称をつけてブランド化することにより、プラスチックがリサイクル性に優れた材料であることを改めてアピールし、昨今の「プラスチックは悪者」とみられるよ

うな風潮に一石を投じる。フィルムのリサイクルシステム開発にも乗り出し、ストレッチフィルムなどを高品質な資源プラに生まれ変わらせる仕組みの構築に取り組む。同社のEPSリサイクル事業の歴史は40年以上にも及ぶ。築地市場で魚箱などとして使われていた発泡スチロールを、熱処理により完全に減容化するための機械を販売し、減量化されたブロックを引き取り有価物として販売するビジネスモデルで、熱をかけることで減菌にもつながる。欧米で主流だった圧縮品では減容量が20分の1程度と熱処理法の50分の1に及ばないことに加え、雑菌や水分が残

## 市場認知度向上へ

### パナ・ケミカルがブランド化



J-EPS recycling®  
A Japanese Original Since 1977

J-EPSリサイクリング  
のロゴマーク

るため、衛生面でも課題が残るのに対し、同社の手法は高品質なことから、国内2000社に設備を納めており、今も年間3万ト、業界シェア80%という強力なリサイクルチェーンを形成している。

#### すでに商標登録

一方、近年の海洋プラスチックごみ問題や中国の廃プラ輸入規制に端を発する

プラスチックが組み入れられるとみられている。その風潮に対し、パナ・ケミカルがこれまで行ってきた取り組みにブランド名を付けて訴えていくことで、環境にやさしいプラスチックリサイクルシステムの認知度を高め、プラスチックが環境対策可能な材料であることを訴える。同ブランドロゴは今年2月に作成し、今月商標登録も実施

プラスチックに対するネガティブな業界で大きな課題になっている。現在、パナ・ケミカルは、一セル条約の改正についても議論されており、今月末には、汚れた

## 「環境にやさしい」アピール

### 軟質フィルムも

同時に、発泡スチロール以外の製品にも同様の仕組みを広げることにも挑戦する。従来なら工業系材料の梱包に使われるストレッチフィルムなどの軟質フィルムは圧縮するだけで輸出できたが、貿易環境が激変していることを受け、同分野の製品に特化したリサイクルシステムの確立を目指す。

以前から協力関係にある破砕機・粉砕器メーカーのプラントシステム(静岡県)と協力して、同社の拠点で使用済み軟質フィルムをリレットするシステム開発に乗り出す。5月から取り組みを開始し、6月には一定の仕組を整えて顧客への紹介を始める計画だ。硬質フィルムなどに広げるとも視野に入れる。パナ・ケミカルは、リサイクルに向く高品質の資源プラの輸出商社として、使用済みプラ処理業者などから回収した材料の輸出も扱っているが、フィルムのリレット化では同社が開発した機械を販売し、そこから再生ペレットを販売して海外に輸出するというEPSで培ったのと同様のシステムの構築を目指している。

また同社が中心となり運営する資源プラ協会もプラスチックリサイクルの認知度および信頼感向上に活用していく。今は広報活動が中心だが、近く認定制度を立ち上げて「認定証」をつけた資源プラなら安心して扱える」といった市場の創出に役立てていく。